解説

心身相関の問題は，哲学史上，古代ギリシア時代以来現代に至るまで，もっとも頻繁に問われ続けられてきたテーマであるが，医学においても同じく，古代ギリシア・ローマのHippokratēs や Galēnos の時代から，疾患における精神と身体との関係は広く論じられてきた．一方，心身相関問題が中心的に論じられるようになる心身医学（本論考では，心身医学という名称の代わりに，精神身体医学が用いられている．しかし，現在では，心身医学の方が一般的で，精神身体医学という用語はほとんど使われていない）は 1818 年の Heinroth による“psychosomatisch”（字義どおり，「心身の」）の概念提唱をもってその嚆矢とされている．しかし，精神医学のなかで心身相関問題が科学的に論じられるようになったのは Freud の精神分析学の登場以来である．

現在では，心身相関問題の考察抜きにして，精神医学を論じることはほとんど不可能となってきているが，その理由の一つは，西丸・大原も述べているように，19 世紀から 20 世紀にかけて確立してきた因果関係によって現象の真理を解明しようとする実証的自然科学的方法への反省と批判が精神医学治療の実践の場からなされるようになったこと，個人に生起する種々の現象を心身の相関において統一的・全体的にとらえていくという「ものの見方の転換」がなされてきたことがあげられる．

心身相関に関する哲学的・精神医学的レヴューである本論考の内容はあえて繰り返すまでもないが，哲学的観点からは，まずはオーソドックスに，心身相関論の歴史上一つの頂点をなす Descartes の心身二元論を中心に，その前後の論を紹介し（西丸・大原は，心身相関論のことを心身思想という言葉で置き換えている），特に，Hippokratēs，Galēnos，Platon，Aristotelēs の思想をごく簡単にまとめ，また，Descartes の思想に対応したものとして，Spinoza に代表される心身平行論，Leibniz の予定調和論，Bergson の意識・身体不可分性について，比較的詳しい紹介を行っている．

以上の哲学的観点からの心身相関論はこれまでにも数多く記述されてきたことであるが，とりわけ本論考の特色といえるのは，精神医学的立場からみた心身相関論の歴史的系譜の紹介であると思われる．西丸・大原は，精神医学における心身相関論は，1）心理的・環境的要因によって惹起される生体の情動の変化が大脳辺縁系や自律神経系を通じて生体に器質的変化をきたすことを主張する立場（神経生理学的立場），2）心理的・環境的要因が生活史的人格存在である個人に無意識的衝動の量的変化を惹起し，それに対する防衛機制として身体的変化を理解する立場（精神分析学的立場），3）精神的症状や身体的症状を，生活史を担った個人が置かれた危機的状況において主体的にとる態度様式として統一的・意味的に了解していく立場（人間学的立場）に分けられるとし，特に後二者に属する，Freud の精神分析学，Weizsäcker の医学的人間学，Uexküll の人間学的心理学，Husserl，Sartre，Merleau-Ponty の現象学，Binswanger，Boss，Zutt の現象学的人間学の，それぞれにおける心身相関論を詳述している．

その内容については本論考を熟読するほかはないが，精神医学における心身相関問題は避けて通れないテーマであるとは言いつつも，著書や論文として公刊されている精神科医自身による心身相関論がきわめて乏しいなか，西丸・大原による心身相関の思想と系譜に関する本論考の意義は非常に高く評価される．

もっとも，精神医学的立場からの心身相関論において重要な，個々の疾患における個別的心身相関論，あるいは個々の精神疾患に病む個人での具体的な心身相関問題については，本論考ではまったく論じられていない．たとえば，現代社会の特徴でもある多発する「うつ病」における心身相関の問題は現在の精神医学における最重要課題の一つであり，また精神疾患における心身相関問題を考えるうえで「うつ病」は格好の対象であると解説者は思っているが，そのような個々の精神疾患における心身相関については本論考では言及されていない．そのような臨床的課題はこれからの精神科医の検討に俟つとされているのであろう．

（松下正明）